

江戸時代

落書類聚

下
卷

矢島隆教編

鈴木棠三・岡田哲校訂

江戸時代
落書類聚

下卷

東京堂出版

江戸時代

落書類聚 下卷

八五〇〇円

昭和六〇年四月 一日 初版印刷
昭和六〇年四月 一〇日 初版発行

校訂者 鈴木 木 堂 三
岡 田 哲

発行者 澄 田 讓

印刷所 文殊印刷有限公司

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十七 (〒100)
電話 東京 三三一七四 振替 東京 三一二〇

3321-360290-5164

© Tozo Suzuki 1985
Satoshi Okada

目次

凡例

江戸時代 落書類聚 卷之參拾壹……………三

文久落書 其二……………三

江戸時代 落書類聚 卷之參拾貳……………三三五

文久落書 其三……………市中巡邏 二

常野

騒乱 四

江戸時代 落書類聚 卷之參拾參……………六五

宮闕免砲 空 元治落書 八

江戸時代 落書類聚 卷之參拾四……………九七

長州征伐 七

江戸時代 落書類聚 卷之參拾五……………一二六

浪士真似 二六 町人用金 二七 干飯松下

二八 銅貨歩増 二六 退隱奏上 三九

服裝改革 一三五 宗家相統 一六六 旗本困窮

目次

二三六 大政奉還 一四八 三条実美 一四九

慶応落書 一五一 見聞私記 一五一

江戸時代 落書類聚 卷之參拾六……………一五五

幕府瓦解 一五五

江戸時代 落書類聚 殘編卷之七……………一九三

大川波濤 一九三 看板制限 一九三 寺院焼失

一九三 梨子一籠 一九三 湯嶋大火 一九五

若老被害 (前編第九卷追加) 一九六 葵紋御免 二〇二

天明落書 (前編第十卷追加) 二〇三 天明洪水 (前

編第十卷追加) 二〇六 七星失光 (前編第十卷追加)

二〇六 寛政改革 (前編第十一卷追加) 二〇九

己丑大火 (前編第十六卷追加) 二二 水野越州 (前

編第二十・二十一卷追加) 二二五 火之用心 二二六

江戸時代 落書類聚 殘編卷之貳……………二三八

金銀改鑄 (前編第五卷追加) 二二八 兄弟仇討 (前

編第五卷追加) 二四六 元文落書 (前編第五卷追加)

二四六 寛保大小 二四七 政岑籠居 (前編第五卷

追加) 二四八 土岐丹州 二四九 寛保落書 (前

編第六卷追加) 二四九 松平乗邑 二五〇 延享

落書 二五三 城代任免 二五四 本多忠良

二五四 能樂興行 二五五 阿部出火 二五五

寛延落書 二五六 茶屋取払 (前編第六卷追加) 二五六

世子元服 二五七 能勢肥後 二五七 依田和泉

二五七 儒者出火 (前編第六卷追加) 二五八

將軍代替 二六 明宮踐祚 二六二 大岡出雲

二六二 堀田相模 二六五 宝曆落書 二六六

劇場焼失 二六六 吉原焼失 二七〇 倭約布達

(前編第七卷追加) 二七一 明和落書 二七三

中洲新地 二七六 天明落書 (前編第十卷追加) 二七七

天明洪水 (前編第十卷追加) 二七九

江戸時代 落書類聚 残編卷之三……………二八〇

己丑大火 (前編第十六卷・残編第一卷追加) 二八〇

大塩後素 (前編第十八卷追加) 二八一 仙石騒動

(前編第十七・十八卷追加) 三〇三 西城炎上 (前編

第十八卷追加) 三〇七 矢部駿州 (前編第十九卷追

加) 三二三 劇場移転 (前編第十九卷追加) 三三四

玉屋出火 三三五

江戸時代 落書類聚 残編卷之四……………三二六

能勢肥後 (残編第二卷追加) 三二六 延享落書 (前

編第六卷・残編第二卷追加) 三二六 八幡旅所 三二

松平乗邑 (残編第二卷追加) 三二三 姫君逝去 三二三

諏訪出火 三二三 二九焼失 三三四 癡狂殺人

(前編第六卷追加) 三三六 吉原焼失 (残編第二卷追

加) 三三七 日蝕皆既 三三九 瘡守お仙 三三九

积尊開帳 三三九 明和落書 (残編第二卷追加) 三三

西丸修繕 三三九 彗星出現 三四〇 古借棄捐

三四〇 天保落書 (前編第二十二卷追加) 三四三

方丈再任 三四五

江戸時代 落書類聚 残編卷之五……………三四六

七星失光 (前編第十卷・残編第一卷追加) 三四六

天保改革 (前編第十九卷追加) 三三七 水野越州

(前編第二十・二十一卷・残編第一卷追加) 三三八

米艦渡来 (前編第二十三・二十四卷追加) 三三八

解題……………三八一

索引年表……………三八七

江戸
時代

落

書

類

聚

下

卷

○文久落書 其二

文久二戊年

いろは短歌此節浮世の噂

いぬもあるけば棒にあたる

ろんより証拠

はなよりだんご

にんを見て法をとけ

ほねをり損のくたびれもうけ

へをひつて尻つぼめる

としよりの冷水

ちりも海山

りやう薬は口に苦かし

ぬす人のひるね

るりも針も照せば光る

をんな賢くて牛売そこなふ

われ鍋にとち蓋

嶋津和泉

此節の御取込

当時桜田橋

大橋順藏牢舎

水浪関新之助

備前岡山

もふけ役人

乗切登城

諸老中公用人

長州の談話

京都より数多の浪人

水野和泉

大奥姉小路

橋に尾公の妹

かつたいのかさうらみ

よしのずいから天のぞく

たびは道づれ

れいぎ過れば無礼となる

そう領の甚六

つき夜に釜をぬかれる

ねんには念をいれ

なきつ面を蜂がさす

らくあれば苦あり

むりが通れば道理ひつこむ

うそから出た誠

ゐの中の蛙

おににかな棒

くさつても鯛

やぶから棒

まくるは勝

けを吹て疵をもとむ

ふぐは喰たし命はおしく

公家衆

諸役人

久世上京

薬師寺

若州の嫡

備中松山

御譜代大名家来

姫路

久貝因幡

評定所

大橋順藏捌

御殿山異人館

明石

夷人応接 水野板倉

内藤紀伊

講武所 外国奉行 上京

故堀織部

安藤一藩

(ママ)

こは三界の首ツかせ
 のど元過ればあつさを忘るゝ
 えてに帆を上げ
 てい主の好な赤多ぼし
 あたま隠して尻かくさず
 さんべん廻つて煙草にしよ
 きくは当座の耻
 ゆだん大敵
 めくら蛇におぢず
 みから出たさび
 しらぬが仏
 あんはいなもの
 びんぼうひまなし
 もんぜんの子僧習はぬ経をよむ
 せに腹はかへられぬ
 すいが身をくふ
 京に田舎あり

水戸隠居の子供
 安藤出勤
 外国人
 和宮様御下向
 講武所教授水道一件
 無人島帰役人
 大御英断
 薩州一条
 黒川備中
 中川家来
 水戸隠居
 安藤ヨリ縁組願
 久世へ
 此節の公家
 若年寄
 御目付方
 当時の紀州公
 横浜の遊女屋

いろは短歌

いぬもあるけば棒にあたる
 るんよりしやうこ
 はなよりだんご
 にくまれもの世にはばかり
 ほねおりぞんのくだびれもうけ
 へをひつて尻つぼめる
 としよりのひや水
 ちりつもつて山となる
 りちぎものの子沢山
 ぬす人の昼寝
 るりも針も照せばひかる
 をいては子にしたがひ
 われ鍋にとじぶた
 かわずの面へ水
 よしのずいから天のぞく
 たびは道づれ
 れいぎすぎて無礼となる

杉浦正一郎
 水戸前中納言
 江原桂助
 松平春嶽
 支配肝煎
 駒井山城守
 久須美佐渡守
 関出雲守
 一宮山城守
 御殿山の英人
 永井主水
 小笠原佐渡守
 内田主殿
 石谷因幡守
 西国浪人
 島津三郎
 松平大膳太夫

そんなして徳とれ

つき夜に釜をぬかれる

ねこに小判

なき面に蜂

らくあれば苦ある

むりが通れば道理ひきこむ

うのまねするからす

あものにへたも御ぞんじない

のうある鷹は爪をかくす

おくにへ泣わかれ

くさつても鯛

やぶから棒

まごにも衣装

げいは身をたすける

ふぐは喰たし命はおしゝ

こをもつて知る親の恩

えてに帆をあげ

てい主のすきな赤急ぼし

小栗豊後守

向井将監

津田近江守

安藤対馬守

土佐容堂

脇坂中務太輔

尾張前大納言

田安前大納言

佐々木信濃守

大名の奥方

下曽根金三郎

大原三位

川尻丹波守

高嶋四郎太夫

山口信濃守

間宮新左衛門

勝麟太郎

板倉周防守

あたまかくして尻かくさず

さはらぬ神にたゝりなし

きからおちた猿

ゆだん大敵

めの上のこぶ

みから出たさび

しらぬが仏

ゑんはいなもの

びんぼうひまなし

もん前の子僧習はぬ経をよむ

せに腹はかへられぬ

すいは身を喰ふ

京の夢大坂の夢

文久二年戊午

千早振神代もきかず此ごろの

帰り花さく常盤のうち

関宿に宿るもこはくはる／＼と

水野和泉守

松平豊前守

名不知

久世大和守

一橋中納言

妻木田宮

上

和宮様

御府内町人

江川太郎左衛門

田村肥後守

小花内膳正

酒井若狭守

越前

大和と川とをいかに越けん

久世

ゆくすへは頼母しいやの針拔は^(釘カ)

白魚

征夷大將軍

異人の舌をやがてぬくらん

執政の虚話を佃のかがり火に

よごれたる浮名も今は洗ひけり

しらでやよれる白魚ぞうき

清き水野の和泉川とは

水野

今下に板倉になれ上なれば

御慎よきを讃美る

九曜巴をとどろかすらん

板倉

鯉

一橋刑部卿

悪人の根を田安とは名のみにて

今はどうせう二位の引込

田安

水ゆへに潜みし鯉の時を得て

今天昇をせしはめでたし

身は堅し腹は大きく武はつよく

このみ徳用会津らうそく

会津

猶御存生と人が

飯蛸

前黄門公

文久二壬戌年

御英邁は輝き

鯨

今上皇帝

魚心あるゆへ水に腸はりし

御書から人の尊みぞます

烏賊

大原三位

上洛の御さいそくかとたずぬれば

烏賊さまそんな事であらうぞ

公敵武敵

二親

越前前中將

二親とはふた心とのなぞなれど

下へは知れぬ御深慮のそこ

御国産

棒鱈

金沢黄門

御先祖の彼我つかす(以下欠)

ても棒鱈ですます国風

一倍光りが金

鯨

尾張前黄門

浪人の鯨とふく巻上し

尾張名古屋の城の御不審

御片目

落書類聚 卷之三十一

河豚

田安重相公

御後見御免になりし田安殿

おふくれづらハ河豚に似つらん

法とも未練とも

鰯

彦根中將

武士らしき家来のなきも道理なり

魚へんと呼ば弱しとぞよむ

最初から志は

海頭

肥前佐賀

初めから思ひこみたる赤心を

替へぬは西の海頭なりけり

四国第一

松魚節

土佐高知

四国にはまづ第一の松魚節

今南海の鎗のをやだま

上京して御諭旨戴き

鯛

嶋津三郎

京で御書江戸で御刀頂鯛は

実に倍臣の目貫なりけり

萩の示談にびく／＼

鰻

久世大和守

上方の咄しに行を冷したで

鰻にかたるつけ焼刃かな

今眼が

鮫

内藤紀伊守

眼が鮫て見ればつかひし借錢の

うまる瀬もなきつまら内藤

取込し賄賂は

魴鯉

安藤対馬守

魴鯉をとりたる上に夷人から

賄賂をとればこれぞ洋銀盜どろぼり

生腐りした

鯖

間部侍従

京都の水が鯖には毒かして

生きぐさりせし再勤の説

兼て見貫し

目高

太田道淳

高く飛ぶ鴨の死に目を悟りしは

実に老功の目高なりけり

出奔人は水天宮の

鮭

筑後久留米

有馬山いな笹原ふみわけて

都へのぼる社本ノマ、社カに神主

切先するとき

太刀魚

浪人

鴨をきり鮫鰐を突き夷を感じし

我日の本にてれる太刀魚

英断に人心が

鱸残

長門萩

人臣の皆誠忠に鱸残の

魚となりしは君が大江なる功

気も長き

鰻

奥州会津

ぬらぐらと出ては引込大鰻

其すむ穴の魚はしられず

*一、「御片眼河豚」は不具の事にて、全く慶頼卿は一眼である。

一、「出奔人は水天宮の鮭」は社家の事にて、水天宮の神主真木和泉守である。

文久二壬戌年
落首

賢しな越路の風の福井より

治まりなびく四方の民草

ひどい目にまゝ逢坂の関宿は

久世／＼といふのみにして

表向ききんで居れど此頃は

柔弱州と人はいふなり

疑ひの身にかゝるかと万代を

神に仏にいのる亀山

何事も磐城平でとりこみし

どろ銀とりと世にあるもうし

分別も智恵も工面も内藤に

紀伊た風なる是までの役

いつまでも山形なりに動きなき

御代をかためん人や此人

皆人の待て板倉世に出てた

もう治まるぞいまの世の中

福井中將

久世

酒井

豊前

安藤

村上

水野

松山

役人の悪事のこらず掘出し

出雲すなをに権谷さん哉

田安からぬ役をしながら口おしや

お顔ばかりが大納言様

世の中に会津の殿の出たからは

急度打ぞよ悪ひあめりか

ありがたや悪魔毛唐を払ひのけ

我日の本を鹿児島神

大膳の大夫とは此君なれや

舅と聶の中を玉して

乱れたる此日の本を修理せんと

いまでも四方の人は薩州

掃部さん井伊了簡はないのかへ

おまへのちやんがこうしたる世を

世の中になくは叶わぬ土佐鯉

よい味はひはきつとあります

脇坂で見えていたらさぞ物毎に

腹の龍野で御座んしたらふ

堀

田安様

会津

薩州

長州

修理太夫

彦根

土州

脇坂

師直の世にあるうちはよけれども

もういけないよ御側の衆

葉師寺

* 師直は井伊大老の事にて、此年御側御用御取次葉師寺筑前守は譴罰、封を削らる。

文久二壬戌年

千代はくれ

是／＼皆さん聞てもくんねへ。世間世上は御武家の世の中、京都なんどは建ふと寝かそと気儘のものだと思ふていたのに、何を聞いたか今度〇〇大そうりきむぜ。西のはてからくつ輪の親分二の丸住居の御札と名を付、のか／＼出かける道に浪人四五百待かけ、時に薩公去年平野がお国へ出かけて頼んで置たよ。交易おやめか毛唐を殺すか。おまへの了簡たつた一つで生死の境だ。御返事聞迄、撰播境に死をして居る、どふだ／＼と真顔で話かけ、そこでおさつはまづ／＼まちなよ。おれも一番やる気で出かけた。鞘はわつても跡へは引かないすかしなだめてごろ／＼引連れ、大坂伏見や京の屋敷へ長屋を拵へ、猿か馬かを飼おく如く、つなぎ留め置き伏見滞留。京の一家へおむすの縁談、相談がてらと戊亥の隅の御殿へ乗

込み、行くと其儘浪人咄して、議奏仲ヶ間の馬鹿公家達らに一ト泡ふかせば、震るいあがつて直に駈出し〇〇殿へと御咄しかくれば、夫は大変どうぞ薩公を頼んで呉るとそつと偷言何分頼むとたのみかけられ、ヨット承知じや、おのれが息子の京の屋敷で暫く居る。屋敷近所の家を買やら、どんどこまき出す京の町人、お取入とて浪人共等の大坂乗出し、京へ飛込み御城を踏破り、酸漿しめろとりきみかくれば、なだめすかせどいつかな聞かない。あげくに伏見で同士打やり合ひ、漸く鎮めりや。京の西にはこはい／＼と思ふ酒井が、俄の騒動。国へ逃げふか向ふへ這入か、うろ／＼狼狽まごつく其さま。よつぽど見にくい、近習となりの御屋敷殿にも、近所他国へ道具を預けて逃るお覚悟。役人なんぞと常はいへども、こんな時には腰ぬけばかりじや。其内長門の息子が出て来て諸国国主が追々来るげな。今に軍の起て来るとて、町や屋敷はワヤ／＼ゴテ／＼手前勝手のお咄し計りでおかしな世界だ。其内昔しの咄しに戻つて、今年此方冷飯食せて坊主にされたり隠居押込、による／＼出かける。お江戸も出たげな。京も出るやら工面のわるいは西側親方、げんにやりぐんにやり日

毎の心配、あげくにや、お職をとふど棒にふり、御加増所か池田灘目の田地も危うい、お髭の塵とる青公卿共のも貰つたお米のおいどがこそばい。其筈、山子で酒屋をするやら肴屋するやら、町人渡世の咽をゑたる罰が当つて、追々お鉢がくる／＼廻るぞ。東の方には今に目くらの寄合計り。関宿狸が播州姫路の俄大名をうまくだまして、お金を四五万まかす積りで、鯖江相伝御取締と京へ出かけて、こつちはお公家の面をお金ではつて廻つてひつくり返し、おどしもどきに一番ヤンヤトいはす積りで、九若達らとうまひ相談。道へ出かけりや萩のおやじや別家が出て来て左兵衛が江戸行、お薩がしんがり。留守は酸漿一番はれじやぞ。しつかりやらかせうかと来て見りや御役御免にお職を棒にふる。御所へいて見りや物もいはなひ。何とつまらん居残り役だよ。中々眼にたつ京の若者、五人男と人に知られた悪たれ者めが、中の顔やらたれやしらぬが、木屋町辺にて姫とこつそりしんねこ酒盛。そこへ踏込かつぎ出してどたまをちよぎり、我物入らずに食らひふとつた胴がら水漬、誰が死骸とせんさく最中に四条河原に首の串ざし、罪の数／＼板に印して地藏盆にはとんだ見せ物。

都一はい大評判だよ。同じ仲間の長野やらうは風を喰ふて行方しれんと。しかし天命どこぞの隅からさがし出され、はりつけしろもののお直打有ぞ。やま輪りおつれの俄かの江戸行、何でも多いと一人吞込、お先真つくらいたれば忽ち、殿さんお馬で遠国御奉行、御土産たつぶりのかく出かける馬鹿の底ぬけ、あてがちこうて富士見御蔵の自身番とはとんだ能役。家内引越諸道具売立借財埋草艸原にらんで、浅草御蔵の三十俵で家内どや／＼お粥をすゝつて、鞋作りの内職やらかせ、榮耀の報ひは早い物だよ。三浦の七こは座敷おろふに、昼夜の番人大そう付とや。悪人追々博明時に、佐兵は今に沙汰なし。御返事どうだエム。国主にまけじと大勢譜代が愚存をぐづ／＼ぬかすか、おさつとゝさん一番めをむき早転たのむとお米はよく出来、時節が直るに、是がすまんと夜が寝られん諸民たすけじや。天下泰平方民敬し申す。サンゲ／＼／

*一、「薩公去年平野が云々」薩公は嶋津三郎、平野は筑前浪士平野次郎国臣の事である。

一、「酸漿しめる」是は京都所司代酒井若狭守を殺せといふのである。「伏見で同士打」寺田屋事件。

一、「木屋町辺に以下大評判迄」は九条公家来嶋田左兵衛大尉の事である。

文久二年戊午
大閏記十段目

水揚かねし風情にて	所司代
思案なげ首しほるゝ計り	九条殿
思置事更になし	永井玄蕃頭
御恩は海山かへがたし	東照宮御造営
たがひの身の仕合	近衛殿・鷹司殿
とこふいふ内時刻が迫る	国主の評議
当りまばゆき出立は	薩州勢揃
高名手柄を見るやうな	同家中
さあ／＼早ふ目出度／＼	浪人
風がもて来る責太鼓	横浜焼打
此内に忍居ること究竟なり	嶋田の妾宅
何れもさらばと言捨て	水戸加勢
行方しれずなりにけり	六ヶ国異船
初めてあかす老母の節義	水戸の老君